

〈研究ノート〉

「思い」を言葉と身体で表現することの意義 —障がいのある子どもと学生、それぞれの実践から—

小 南 佳 世

1. はじめに

現代社会はデジタル化が進み、とめどなく出現する情報に溢れている。そのため、自らと向き合い気持ちに耳を傾ける機会が減少していると感じられる。自らの気持ちを知ること、そしてその思いを表現して相手に伝えるということは、あらゆる世代のそれぞれが属する社会や生活の中で本来必要なものはずである。

数年前、先天的に障がいのある子ども達が各々の言葉を詩で表現し、その詩に曲がつけられた音楽に出会った。それらの詩はどれもものすごく純粋に気持ちが表現された綺麗な言葉であり、その音楽をもとに筆者が振り付けを行い、身体で表現した。その経験を経て、筆者が担当する授業の中でも、学生と相談しながら意思や感情を表現するダンスを作ることにした。

本研究では、身体を動かすことが困難な子ども達の言葉を身体で表現すること、学生の思いを言葉として表出し、その言葉を身体で表現することの意義を検討する。

2. 身体を動かすことが困難な子ども達の言葉を身体で表現する

障がいの有無に関わらず、人は日々の生活の中で様々な感覚を用いて、まわりのことを感じている。何かを見て感じることもあれば、聞いて感じることも、触れて感じることもなど、様々である。その感じたことが喜びのこともあれば、そうでないこともあり、さらに不快なことや危険を感じるということもある。そのような場合、人は誰かにそのことを伝えたくなり、伝える必要もある。伝えたいことが数多くある中で、伝えることが困難な場合、じっと心の中で思いを巡らせているのだろう。その思いを読み取り、表出する方法のひとつが筆談や指筆談である。今回の子どもの詩は柴田（2015）が筆談や指筆談等を実施して表現したものである。柴田は筆談や指筆談以外にも様々な機器を用いて、運動の障がいのために発話や書字に困難を抱える人達からの言葉の表出を可能にしている。一方で、「筆談援助は本人の言葉であるのかが曖昧で非科学的との見解もある」¹との見方も存在する。また、障がい特性によっては、言語的発達が難しい場合があると指摘されている。そのような中で、柴田は「見かけの障害にかかわらず、人はみな豊かな言葉の世界を持っており、沈黙の中で研ぎ澄まされた

言葉は独自の輝きを持っているという考えに立つにいたりました。」²と述べている。この見解は、筆者自身も深く共感させられた。言葉を超えて心に直接響くものがあり、それらの詩を目にした際、身体でその世界を表現したいという思いが自然に湧き上がった。一つ一つの言葉の意味を吟味し、音楽の雰囲気をつえながら振り付けを進めた。振り付けが完成し音楽に合わせて踊ると、音楽・詩・身体が融合し、作品に深く入り込み感情が込み上げられる感覚を体験した。

2-1. 方法

『僕の世界』

本研究では、対象の一人である研究協力者（現在 29 歳、詩を表現した当時は 18 歳。以下 A とする）に会い、インタビューを通して感想を収集した。A は全前脳胞症のため、生まれつききわめて重い障がいがある。全盲であること、自力で身体を動かすことが困難な A の思いが、柴田の指筆談により言葉になり、詩として表現された。詩のタイトルは『僕の世界』である（図 1）。本詩は、全盲者が直接的

『僕の世界』

僕はずっと動かないこの体で耳を澄ましてきた
まるで貝殻のようなこの耳がすべてを聞き取ってた

目が見えなくても困ることそんなにないよ
美しいものは大体 音でやってくるから

ステキな音楽を聴いたり ステキな人の声を聞いたり
僕はずっと音の世界で幸せに生きてきた

歌うことはできないけど 誰かが僕のために歌ってくれたら
それは僕が歌ったと同じなんだ

目が見えなくても心は見える
心は見えなくても聞こえる
心は聞こえなくても伝わる
だから僕はいつまでも心を感じていたい 君と・・・

でももし もしもだよ 見ることができるとしたら
空の色と花の色 君と見たいな

図 1 詩『僕の世界』

に表現できない要素を含むが、芸術表現の一つとして原文を尊重し、そのまま掲載した。

A の前で『僕の世界』のダンス映像を提示し、本人および母親からインタビュー形式で感想を収集した。質問の内容は A には選択肢を用意し、指筆談により選択できるよう作成した。

2-2. 倫理的配慮

本研究では、障がいのある子どもおよびその保護者の協力を得てインタビュー調査を実施した。調査に先立ち、研究の目的や内容について説明を行い、当該情報（障がい名を含む）の公開に関しては、本人からは意思表示による同意を、保護者からは口頭および書面（署名）による同意を得た。

2-3. 結果

A 本人および母親への質問内容と回答を表に示す（表 1.2）。A の最初の発言は「もう一度見たい」というものであり、再度映像を鑑賞した。結果的に A への質問は選択肢を用いる必要はなく、指筆談により自身の言葉で多くを表出した。インタビューでの質問を開始する前に、本人の言葉として次のように述べた。

「思い」を言葉と身体で表現することの意義

「とても感動しました。僕の歌がこんな風に広がっていくことがとても信じられないし、びっくりしました。」

Aも母親も詩がダンスへと変容したことに喜びを感じている。そしてその作品はこれまでと全く違う作品になった印象を持っている。また、様々な方法で気持ちを伝えようとしていること、その気持ちやAの世界を広めたいという思いが伝えられた。

最後に、『僕の世界』の音楽に合わせてAの手を取り左右に揺らしながら一緒に踊ることができた。音楽を聞き動画を見た母の感想を聞いて、自分の感想を述べた。

① Aくんの詩が踊りになってどう思いましたか。(複数可)	① Aくんの詩「僕の世界」の踊りをどう思いましたか。
嬉しい・嬉しい・何も思わない・恥ずかしい・変な感じ・驚いた	優しい踊りで、こういう風に受け取ってもらえたんだと思いました。
とっても嬉しいし、恥ずかしくなんか全然ない。むしろもっと使ってほしい。	そして、曲が進むとダンスも盛り上がりがあって、優しいダンスになって感謝しています。
② Aくんの詩が歌になった時はどう思いましたか。(複数可)	② Aくんの詩が歌になった時と踊りになった時で感情面に違いがありましたか。
嬉しい・嬉しい・何も思わない・恥ずかしい・変な感じ・驚いた	曲だけのときと踊りとは全然違う。
嬉しかった。驚いたけど僕の中ではなんとなくイメージできていたから、ああ現実になったんだなと思いました。	心が温かくなって感動しました。
③ 「僕の世界」に踊りが付いたことで、詩に対する気持ちが変わりましたか。	③ 今後Aくんの表現方法に期待するものはありますか
より好きになった・好きではなくなった・変わらない	指談だけでなく、テレビシーミたいなものがあると良いなと思います。
なんか違う作品の感覚。	普段から表現してくれて、伝えようとしてくれています。
④ これからも詩を書きたい気持ちが強くなりましたか。	できないって決めないで色々な方法を見つけていきたいです。
はい・いいえ・変わらない・わからない	
いつもあるけど、僕の世界を伝える手段だから、色んな形で広がってくれるのはとても嬉しい。	
⑤ Aくんも気持ちを身体で表現したいですか。	
はい・いいえ・わからない	
したいよ。したいし、してるつもりだけどなかなかできない。	

表2 Aの母親へのインタビューの質問と回答

表1 A本人へのインタビューの質問と回答

2-4. 考察

Aおよび母親からは、詩がダンスへと変容したことに対する驚きや喜び、さらには感動が示された。このようなポジティブな感情の喚起は、日常生活の中での意欲や充実感の向上に繋がると考えられ、その点においても言葉を身体で表現したことの意義が認められる。また、「詩が歌になることはイメージできていた」という発言から、Aが今後、内面に生じる思いを歌（音楽）で表現するという新たな方法が見込まれる。柴田はこの度、「Aの言葉に身体表現が加わったことで、言葉を受け取った人の感動にかたちが与えられたような気がする」と述べた。つまり、既存のものに新たに加わる感覚を得られるということから、母親はダンスの映像を見た際、全く違う作品のような感覚を持ち、その反応からAも同様の感覚が得られたと思われる。Aにとって詩が身体で表現された体験は初めてであり、『僕の世界』の音楽に合わせて共に踊ったこの体験を機に、さらに身体表現でのイメージも広がる可能性が示唆される。

ここでミラーニューロンの観点から考察を加える。イアコポーニ（2011）によればミラーニューロンとは、他者の行動を観察すると、あたかも自分が同じ行動をしているかのように反応する神経細胞であり、自身が身体を動かしていなくても他者の行動に対する知覚によって反応が生じることが確認されている。「視覚」に限らず「聴覚」においても認められる。すなわち、ボールを蹴る動作を自ら行った場合だけでなく、ボールが蹴られる様子やボール自体を見たり、蹴られる音を聞いたり、あるいは「蹴る」という語を発したり聞いたりした場

合にも、同じように活性化することが報告されている。つまり、人は見たり聞いたりするだけで、他者の行動を自身の脳内でシミュレーションしていると考えられる。Aに関しては、「聴覚」を通じた知覚により、身体を動かす場合と同様の神経細胞が活性化することになる。このことは身体を動かすことが困難なAにとって、きわめて重要な意味をもつと考えられる。Aに限らず、身体を動かすことが困難な人々において、身体で表現されたダンスを見たり、音として聞いたりすることは、普段の生活ではあまり反応しない運動に関わる神経細胞を呼び覚まし、活性化させる可能性があると考えられる。さらにミラーニューロンは、個人間のコミュニケーション能力や、他者の行動や心理状態の理解に関わる重要な役割を果たしていると指摘されている。まさに「目が見えなくても心は見える、心は見えなくても聞こえる、心は聞こえなくても伝わる」というAの詩そのものである。Aの思いが詩となり、音楽となり、ダンスになることにより耳で聞きながら目で見える媒体となった。このことによりA自身や関わった人々への理解が深まり関係性が強まったと考えられる。

今回の経験より、言葉での表現以外にも、気持ちを身体や音楽で表現する可能性が見出された。そのことにより、今後コミュニケーションの方法が広がり、自他の理解がさらに深まることで、気持ちを伝え、互いに分かち合う機会が増えることが期待される。

そしてそのためにも身体で表現をする側は、気持ちが表出された言葉一つ一つを大切に受け止め、真摯に向き合いながら踊ることが求められるであろう。

2-5. まとめ

身体を動かすことや自らの思いを自力で伝えることが困難な子どもの言葉を身体で表現し、そのダンス映像を目の前で披露した。思いが身体で表現されることは、本人だけでなく、まわりの人々にも喜びの感情が生じ、意欲や充実感につながることを確認できた。また、新たな表現方法を体験したことにより、日常生活であまり活性化する機会のない神経細胞に刺激が入ることが期待される。このことは、表現の幅を広げると共に、自他の理解を深め、人との関わりを円滑に進められる能力の向上に繋がると考えられる。

3. 学生の思いを言葉として表出し、その言葉を身体で表現する

冒頭でも述べたように、人は日々の生活において、様々な感覚を通して多くのことを感じている。それを他者に伝えることは必要で大切であるが、近年では内面の思いに向き合う機会が減少し、表現したい内容を正確かつ適切に伝えるコミュニケーション能力がやや低下しているように思われる。こうした状況を踏まえ、『僕の世界』での経験をもとに、自らの気持ちや思いを表出し、身体で表現する機会を設けることは意義があると考えた。そこで、筆者が担当するポピュラーダンス（初等）の授業において、初等芸術教育学科をテーマにしたダンスを創作した。受講生は同学科に所属する2回生から4回生の10名であった。

3-1. 方法

『しょとげいのうた』

ダンスを創作するにあたり、まず学科の音楽作成から取り組んだ。学生には、将来の目標を選んだ理由や大学での生活について質問し、言葉で表現してもらった。質問内容はテーマを2つに区分し、学生から得られた言葉をまとめた(表3,4)。これらの言葉を基に、筆者が作詞・作曲を行い、『しょとげいのうた』という曲を制作した(図2)。

将来の目標について	大学について
<ul style="list-style-type: none"> なぜ教員を目指そうと思ったのか どのような先生になりたいか なぜ初等芸術教育学科を選んだのか 	<ul style="list-style-type: none"> 学科の印象 学生生活 仲間(友人)との関係

表3 学生への質問内容(将来の目標や大学について)

将来の目標について
<ul style="list-style-type: none"> 不登校の子どもをへらしたい たのしい学校・クラスをつくりたい 「休日がもの足りない、学校に行きたい」と思える居場所にした 芸術を通して子どもとふれ合いたいから 子どもの成長を見守りたいから どんな人にも寄りそえるような人になりたいから すみっこで泣く子を減らしたかった 子どもといっぱいあそびたかったから 元気な子ども 気づばりできる人 ピアノ上手な先生 やさしい先生 子どもがすき 子どもかわいい 芸術のプロになるっ! みんなが楽しい毎日を送れるように。 私は、高校時代の経験から、人に物事を分かりやすく伝える職業に就きたいと思いました。 私は楽しい先生になりたい やさしい子ども たのしいがっこうづくり
大学について
<ul style="list-style-type: none"> みんなが大好き 仲よし 大好きな仲間たちと大切な時間を過ごしたい 個性が豊か 自分さがし

表4 質問(表3)に対する学生の言葉(※原文通りに記載)

『しょとげいのうた』
<p> 子どものころに好きだった 先生みたいになりたくて 不安はたくさんあったけど 「しょとげい」にやってきた ひとりひとりは違うけど すぐにみんなと仲良しに みんなと楽しく学ぶんだ すてきな居場所「しょとげい」 </p> <p> 元気いっぱい子どもたち 楽しく一緒に遊びたい ピアノもダンスもお絵かきも みんなと一緒にがんばろう やさしい先生になれるかな 自分さがしに飛び出そう 夢にむかって進むんだ すてきな居場所「しょとげい」 </p> <p> 「しょとげい」に来てよかったな 大好きな仲間たち 大切な時を過ごそうね すてきな居場所「しょとげい」 </p>

図2 歌詞『しょとげいのうた』

「しょとげい」という言葉は、初等芸術教育学科を略したもので、学科内での愛称である。その『しょとげいのうた』を用いてダンスを創作した。一つ一つの言葉に対し、相応しい表現を相談し、難しい場合は筆者が提案しながら進めた。ダンス経験のある学生が主導する形で進めたが、一方的になることなく、全員が意見を出し合い、互いに聞き合うことができていた。ダンスの完成後、学生たちが歌った『しょとげいのうた』を録音した。音楽に合わせてダンスを練習し、撮影を行い、全てが手作りのダンスを完成させた。

本研究ではポピュラーダンス(初等)の受講生を対象に、各過程の中で感じたこと等について7問の自由記述式アンケートを実施し、5名の学生から回答を収集した。

3-2. 倫理的配慮

本研究では、学生を対象にアンケート調査を実施した。調査に際しては、「アンケートの回答は研究の一環として使用します。個人情報が開示されることは一切ありません。同意のもと回答をお願いします。」との文言を明記し、口頭でも説明を行った上で、同意を得た者のみを対象とした。アンケート調査は、成績評価完了後に実施し、回答は学生の自由意思に基づいて行われた。得られたデータは匿名化した上で、研究目的以外には使用していない。

3-3. 結果

受講生 10 名のうち 5 名にアンケートを依頼し、5 名全員から回答を得た。得られた回答はいずれも有効であり、有効回答率は受講生全体の 50%であった。

回答は個別に分析し、アンケートの質問内容と共に主な傾向と全回答を示す（表 5）。

①（イメージや思い・考えを実際に言葉として書き出してみようと思いましたか。）

記憶を遡り当時の気持ちを思い起すことで初心に立ち返り、自らの気持ちや考えを整理し、再考する機会を得たようである。さらに内容が視覚化されることで、自分自身を客観的に振り返ることも可能となっている。

②（表現した言葉が歌詞になってどう思いましたか。）

表出された言葉は、筆者が可能な限りその思いを汲み取り、適切な表現に要約して歌詞とした。その際、一つの言葉に様々な思いが込められていることが伝わっている。また、自身の言葉が歌詞として形となることに対して、気恥ずかしさと喜びの両方を感じている。

③（自分たちが表現した言葉が音楽になってどう思いましたか。）

内的な考えが歌詞となり音楽と共に耳に入ることで、よりイメージしやすくなるようだ。さらに自分自身だけではなく、他者にも言葉の意味が伝わりやすくなると感じている。

④（自分たちの言葉からダンスを作ってみようと思いましたか。）

ダンス創作に不慣れな学生も多く、難しさを感じる場面もあった。しかし、自らが表出した言葉を基に、協力してまとめ上げていく過程に楽しさを見い出したようである。

⑤（自分たちで作ったダンスを自分たちの歌に合わせて皆で踊ってみようと思いましたか。）

普段は苦手意識を持っていたダンスも、自ら創作した作品を踊ることで嬉しさや楽しさを感じている。また、一つの作品を作り上げたことで仲間との繋がりが芽生え、互いを意識しながら踊り、達成感も得られたようだ。さらに、最後まで踊りきろうとする意欲も見られた。

⑥（皆で踊っている映像を見てどう思いましたか。）

自分たちで創作して踊ったダンスの全体像を捉え、作品を客観的に見ることができている。映像上の自分や友人に対して普段とは違う一面を感じたようだ。

⑦（ダンス「しょとげいのうた」が完成してどう思いましたか。）

完成したことへの達成感と喜び、さらにまた作りたいという意欲に繋がった。学科や仲間

「思い」を言葉と身体で表現することの意義

に対する大切な思いがさらに深まったようである。このダンスによって学科がより周知されたものになってほしいという思いも生じている。

<p>① イメージや思い・考えを実際に言葉として書き出してみてどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 目標や学科を選んだ時の気持ちを思い出すことが出来た。 ・ この学科ならではの良さを共有することができた。 ・ 頭の中で思っていたことが視覚化されることで自分が「教師」という職業に対してのやる気や不足部分を知ることができた。 ・ 自分が入学したときのことを思い出して初心に戻ったような感じがありました。 ・ 言語化を行うことで自分の思いを整理することができたと感じました。 ・ 先生になりたいという意味とこの学科で学ぶことの楽しさを再確認できたように感じる。 ・ 自分が持っていた最初の思いを思い出したと同時に今、同じことを考えているかなどの乖離も浮かんた。 	<p>⑥ 自分たちで作ったダンスを自分たちの歌に合わせて皆で踊ってみてどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 達成感があった。 ・ ダンスは苦手だけどいつもより楽しめた。 ・ 人数がいるほうが手をつないだり、同士に違う動きを取り入れたりできるからすごくおもしろかったです。 ・ 踊っている間に時々見える自分と違う振りを踊っているのを見ると、同じイメージでつながっていると思えたのでつながりを感じながら踊ることができました。 ・ 素直に楽しかったです。 ・ 自分たちの考えを表現することは難しいと思っていましたが、思っていた以上に簡単に楽しいものだと感じました。 ・ 横で誰かが一緒に踊ってくれるという状況に楽しさと安心感を覚えた。 ・ そこまで遅くない曲調でのダンスだったので踊りきるのが大変でした。
<p>② 表現した言葉が歌詞になってどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ しょとげいの良さが詰まっていると思いました。 ・ 複雑だった考えがシンプルにまとまってすてきな感じになりました。 ・ みんなで作っているから1つ1つの言葉の裏には色々な感情が含まれているんだなと思いました。 ・ 不思議な感覚でした。 ・ 自分たちがイメージしていることが歌詞として音楽にのるというのは面白いと感じました。 ・ 自分たちの考えた言葉がリズムに合わせて当てはまっていくことにワクワク感を覚えた。 ・ 気恥ずかしい思いもあったが、良い出来になったと感じた。 	<p>④ 皆で踊っている映像を見てどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ よく出来ていると思った。 ・ 真似しやすいうように見えた。 ・ すごくほのぼのしました。 ・ それぞれの場で手をつないだり、ポーズしたりしていかわいかったです。 ・ 達成感がありました。 ・ 平和でかわいらしい曲とダンスでしょとげいの世界観が現れていて素敵だと感じました。 ・ 普段授業では見ることのできない、学友たちや自分を見て不思議な気持ちになった。 ・ また、以外な一面がみれて嬉しかった。 ・ ダンスが遅れている箇所もありましたが、最後まで踊りきることができる難易度で良かったと感じています。
<p>③ 自分たちが表現した言葉が音楽になってどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 曲づくことについて歌詞の意味をイメージしやすくなった気がしました。 ・ 「しょとげい」という場所の雰囲気や伝わりやすい曲だなと感じました。 ・ 「しょとげい」に対する思いが様々な人に伝わりやすくなって嬉しいと感じました。 ・ 文章よりも心にすんなり入ってきているように思った。 ・ ただの文章よりも感情が乗ってて相手に伝わりやすいと思った。 ・ 音楽、特に作詞の点で表現した言葉をそのまま使うよりも、同じ意味で違う言葉を扱った方が良いこともあると感じた。 	<p>⑦ ダンス「しょとげいのうた」が完成してどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初等芸術のテーマソングにしてほしいと思った。 ・ 曲もダンスもすごくやさしい感じがするのでオープンキャンパスなどでもっとやりたいたいと思いました。 ・ 「しょとげい」というのをシンプルに伝えることができるダンスだなと思うのでこれからしょとげいに入ってくる子や教員を目指そうと思っている子に1つの場として知ってほしいです。 ・ しょとげいの魅力を歌詞とダンスに込めることができ良かったです。 ・ しょとげいに入って良かったと思いました。 ・ しょとげいの魅力がもっと多くの人に伝わるといいなと思いました。 ・ 完成したことにとっても達成感を感じた。 ・ また、だれかとダンスを作ってみたくていいなと思った。 ・ 難しいダンスでしたが完成して良かったと思います。
<p>④ 自分たちの言葉からダンスを作ってみてどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉に引ばられて、ダンスを作るむずかしさを感じた。 ・ 動きをつなげるのが難しいと感じた。 ・ 自分たちで出した言葉ばかりだから連想しやすく、頭の中に動きがたくさん出てきて作りやすかったです。 ・ みんなで作っていると「先生」という1つの言葉だけでもそれぞれイメージが違うから色々な案が出ておもしろかったです。 ・ ダンスを作ることは難しかったけれど、言葉を出した人たち同士でダンスを作ったので、皆の考えが一つになった感覚で面白かったです。 ・ グループごとで違う振り付けを考えるのも面白かったです。 ・ 動きを考えるのはダンス経験が乏しいため難しかったけれどみんなで考えたダンスが言葉にハマっていて気持ちよかったです。 ・ 言葉からダンスを考えていったので動きの大変な場面もあり、難しさも感じた。 	

表5 アンケートの質問に対する回答（※原文通りに記載）

3.4. 考察

思いを言葉にする過程は、学生たちにとって改めて頭の中を整理すること、初心に帰る契機となったようである。そして、その思いを書字することで言葉が視覚化され、その言葉が音楽として自身の歌声に表出されることで聴覚化された。自らの思いを歌という形で聴くことは、自己を見直すきっかけになると考えられる。ダンス創作においては歌詞を黙読・音読し、練習では歌を繰り返し聴いた。さらに完成したダンスを映像で見ることにより、表現した言葉を、再度音楽を通して聴きつつ、それが身体表現として可視化されたものを同時に体験することができた。長澤（2013）によれば「日常的に情報量として脳がインプットしている五感の割合は、視覚が83%、それに次いで聴覚は11%となっており、圧倒的に視覚からの情報量が多い」³とされている。自らの思いを文字と身体で表現したものを見る、そして思い

を聴くという今回の体験は、明らかにした内面の思いが再度視覚と聴覚を通して、強烈なインパクトとしてインプットされたと思われる。そのことから各自の目標や気持ちが再確認され、確固たるものとなったはずだ。

そして、言葉を視覚と聴覚を通して受け取る際のインプットの違いについてである。佐藤(1999)によればモダリティ効果のことを、「言語材料を記銘する際、呈示モダリティによって記憶や理解に差が生ずること。単語や文字の記憶は視覚よりも聴覚呈示や音読条件の方が優れている」⁴としている。また、高井(1989)によれば「自己評価においても、聴覚呈示の方があらすじの記憶や理解に有意な結果が得られている」⁵。本研究においても、思いを音楽として聴くことで言葉の理解が容易になり、イメージが広がりやすくなった。そのことが、他者にも伝わりやすい表現へと繋がったと感じられたのであろう。文章の型に関しては、高井によれば「視覚呈示・聴覚呈示のいずれにおいても、会話型・内省型の方があらすじ型より共感性が高い」⁶とされている。『しょとげいのうた』は学生の思いを要約した内省型であり、同時に語りかけるような会話型でもある。そのため、夢や学科への思いに対する共感が深まり、思いの共有を通じて絆が強まったと考えられる。

次に言葉を身体で表現したことについて述べる。イメージとは諸感覚から得た情報や感情を通して作り出されていく。知覚されたものが過去の経験により形成されていたイメージと合わさり、新たなイメージが生み出される。そのため、同じものを見聞きしても、各人により作り出されるイメージは異なる。一つの言葉から複数の動きの案が生じるのはそのためである。この発想の違いを面白いと捉え、皆で一つのものに作り上げていく過程は、自他の内面を知る契機となる。さらに、イメージを豊かにするためには、日頃から感性を研ぎすまし、経験を蓄積する必要があることへの気づきにも繋がるだろう。また身体表現は、内なる心を外的な形に表すものと考えられる。そのため、自らを他者に向けて表現するだけでなく、自分自身への表現にもなる。まるで鏡に映った自分を見ているような感覚であり、身体を動かすことにより、これまで気づかなかった一面を明らかにするきっかけとなる。映像を見た際に自分自身や友人の意外な一面を見ることができたと感じたのも、その表れであろう。内面の思いを身体全体で表現する今回の体験では、踊りながら過去や日常の自分、さらにはこれまで知らなかった自分等、様々な自己を感じ取ることができた。また、共に踊る仲間に対しても、心が通じ合い、内面同士で対話しているような感覚が得られ、ダンスに楽しさを見出した。このような気づきは自己理解だけでなく他者理解にも繋がり、関係性を深めると考えられる。

3-5. まとめ

学生たちの意図や感情を言葉として表出し、その言葉を身体で表現した。言葉として表出することは、改めて自らと向き合う機会に繋がった。言葉を視聴覚で何度もインプットする

ことを通して、自他に対する理解が深まることがわかった。その言葉を身体で表現することにより、他者との違いを認識し、その違いを踏まえた上で一つのことを創り上げていく過程を経て、関係性が深まった。そして、ダンスに対する苦手意識の克服に繋がった。さらに、ダンスを踊り、見るという行為により、これまで積み重ねてきた各々の経験に加えて、自他の新たな一面を知るきっかけとなり、身体という媒体を通して内面で通じ合うことが可能となった。様々な方法でコミュニケーションを重ね、自らと向き合い、相手とも向き合いながら一つのものを作りあげた経験は、社会の中で他者との意思疎通を円滑におこない、意思や感情を効果的に伝える能力を養うであろう。

4. 総括

本稿では、身体を動かすことが困難な子どもの言葉を身体で表現すること、学生の思いを言葉として表出し、その言葉を身体で表現することの意義を見出すため、インタビュー並びにアンケート調査を実施し、ミラーニューロンやモダリティ効果等の観点から検討した。

身体を動かすことが困難なために発話や書字が不可能な子ども達の言葉を身体表現化したものを共有することにより、意欲や充実感が生じること、そして新たな表現方法の可能性を見出すことができた。

学生の思いを表出することは、自らと向き合い初心に戻りながら意思を見直すきっかけとなった。表出した言葉を協力してダンスとして作り上げ、身体で表現したことにより、苦手意識の克服に結びつくと共に、言葉に関する思いや仲間との絆が深まった。

さらに身体を通じた表現を実際に行い、それを知覚することを通して、コミュニケーション能力の向上や自他の新たな発見と理解の深まりをもたらした。

思いを身体で表現することは、その思い一つ一つをより丁寧に感じ取ることに繋がる。また、日頃の感性や知性のアンテナを広げる機会ともなり、自分自身と向き合うことで内的な世界を豊かにする可能性がある。

注

- 1 しかし、1991年よりアメリカにも導入された際、D.L.Wheelerら(1993)のblind testによる実験では、FC(表出援助法・筆談援助法/Facilitated Communication)の妥当性を否定する結果が得られ、本人の言葉であるのか曖昧で非科学的との見解もあると説明されている。大塚美奈子(2024)「思春期ASD女子の意思に添う支援とQOLの向上—指筆談をきっかけとした母親の意識変化から—」『学術研究所報』巻3、上田女子短期大学、pp.64-76
- 2 柴田保之(2015)『沈黙を越えて—知的障害と呼ばれる人々が内に秘めた言葉を紡ぎはじめた』萬書房、p.5
- 3 五感とは、視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚であり、日常的に情報量として脳がインプットしている割合は、視覚83%・聴覚11%・嗅覚3.5%・触覚1.5%・味覚1.0%となっており、圧倒的

に視覚からの情報量が多い。長澤良介 (2013) 「Vision Training の効果検討」第 48 回日本理学療法学会大会 (名古屋)、O-A 基礎 -248

4 モダリティ効果 modality effect 佐藤浩一

言語材料を記録するとき、呈示モダリティによって記憶成績に差が生ずること。単語や文字リストの直後再生 (自由再生、系列再生) では、材料を視覚呈示するよりも、聴覚呈示したり音読させる条件の方が、特にリスト終末部の成績が優れており顕著な親近性効果が得られる。中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (1999) 『心理学辞典』有斐閣、p.841

5 各問の評価値について、呈示モダリティとテキストの効果をみる為に、呈示モダリティ (聴覚・視覚) × テキスト (あらすじ型・会話型・内省型) の 2 要因分散分析を行った。その結果、問 2 (物語のあらすじを憶えていたか) 及び、問 4 (物語は理解できたか) で、呈示モダリティの主効果に有意差がみられ、いずれの質問でも、聴覚呈示群の被験者の評価値の方が視覚呈示群の被験者の評価値よりも高かった。高井かづみ (1989) 「物語の記憶・理解における呈示モダリティ及びテキストの効果」『教育心理学研究』第 37 巻第 4 号、p.389

6 両モダリティ群に共通して、会話型や内省型のテキストを呈示された被験者は、あらすじ型のテキストを呈示された被験者よりも、主人公への共感度が高い。高井かづみ (1989) 「物語の記憶・理解における呈示モダリティ及びテキストの効果」『教育心理学研究』第 37 巻第 4 号、p.389

参考文献

マルコ・イアコポーニ・(訳) 塩原通緒 (2011) 『ミラーニューロンの発見「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学』早川書房

柴真理子 (2018) 『臨床舞踊学への誘い—身体表現の力—』ミネルヴァ書房

寺山由美 (2017) 「「表現運動・ダンス」領域における「身体表現」—「意図のある動き」の形成から捉え直す—」『体育・スポーツ哲学研究』Vol.39、No.2、pp.95-108